新 刊 Book reviews

□大原隆明：**サクラハンドブック** A5変形 (205 × 120mm), 760 pp. 2014. 山と渓谷社. ￥4,540+税. ISBN 978-4-635-07032-4.

スキャナ画像による図鑑が，続々と刊行され始めた．ただ，種類の配列はまだ共通なやり方がなく，本書では栽培品が多いためもあろうが，野生（8種類），栽培品/早咲き（7種類），栽培品/同時期（9種類），栽培品/遅咲き（9種類），栽培品/二季咲き（4種類）というまとめになっている．野生種はヤマザクラ，オオヤマザクラ，カスミザクラ，オオシマザクラ，マメザクラ，タカネザクラ，チョウジザクラ，エドヒガンである．この「早咲き」とか「遅咲き」という区分は，2頁の「本書の見方」によると，ソメイヨシノとの対比による，としてある．一般向けの図鑑で，こういう区分はあまりお目にかからないが，花期を外していたらどうしようと考える．これについては8–9頁に，花部を含めて特徴の見分け方の解説がある．

本文は見開き2頁に一種類を当て，左頁には開花時の景観，花の正面と裏面，萼や花筒の形質や花序の苞葉が示され，右頁には葉の全形，鋸歯，葉柄の腺点，その他の特徴ある部分が示されている．

他の植物についても，こういう個別のグループの図鑑があればよいと思うが，そうなると，グループに行き着く検索手段が必要になる．従来の「分類体系」ではまとめにくいご時世になったので，そういうことにこだわらない，石戸 忠氏や大川ち津る氏の作品が参考になるだろう．

（金井弘夫 H. KANAI）

□塚谷裕一：**スキマの植物図鑑** 新書版．182 pp. 2014. 中公新書. ￥1,000+税. ISBN 978-4-12-102259-2.

東大の理学部二号館裏に，十年ほど前に新しくできた「懐徳門」を出て，本郷三丁目へ向かう狭い路を行くと，左側は低い石垣が続く．その石の隙間にいろんな植物がポツポツ生えていて，著者はこんな所から本書のヒントを得たのかな，と思ったのだが，あとがきによるとそのきっかけは，ひところ話題になった，アスファルトの隙間に生えた「ド根性大根」とのこと．目に入った何ごとも，興味の対象に取り込む姿勢は，見習いたいものだ．

約106種類の雑草雑木の生活ぶりが，カラー写真と共に，軽いタッチで記されていて，隙間というものが植物の生存競争に有利な環境であることを教えてくれる．中でも面白かったのは，173頁のロゼットで，石垣の大勲位勲章のようにロゼットが展開しているのが，重力屈性の常識に反することに，言われなければ気付かなかった．こういうことは，宇宙船の公募実験には，採用されていなかったのか？

撮影の場所は著者の仕事の関係か，愛知県が40%強，東京と神奈川が20%弱，あとは中部以西の県．中には外国の町もある．その合間にAPGIIIの系統樹の説明や，「帰化」という呼び方についての，最近の動きなどの話題が提供される．

植物観察は，しかるべき場所に行かなければできないのではなく，心がけ次第でどこにでも適地があるのだ，と教えられる．

（金井弘夫 H. KANAI）

□清水建美（編・解説），門田裕一（改訂版監修），木原 浩（写真）：**高山に咲く花** 増補改定新版（山渓ハンディ図鑑8）. A5変形. 512 pp. 山と渓谷社. ￥4,200 +税. ISBN 978-4-635-07030-0 C0645.

2002年に初版が出版された「高山の花」の増補改訂版である．旧版から16ページ増になったにもかかわらず，厚みが薄くなり，重量も100グラムほど減っている．ザックに入れて山に持って行くことを考えるとたいへんありがたい仕様である．見かけ上の大きな改変は種類の配列の変化で，分子系統解析の結果を反映した新しい分類体系（APG分類体系）に従っている．これは繰り返しめくっていると目が慣れてあまり気にならなくなるだろう．配列の変化に従い，単にページが前後するだけでなく，同じページに印刷されていた写真が別ページにわかれることがあり，写真やそのレイアウトが変更になっているところもある．紙が変わったせいか，製版技術の進歩か，写真のシャープネスは全般的によくなっているようだ．最近の分類学の成果が随所に反映されており，特に門田氏が得意な部分では思い切った改訂がなされている．同じ写真の植物名がタカネヒゴタイ *Saussurea triptera* var. *minor* からシラネヒゴタイ *S. kaialpina* にかわっていたりして驚かされる．新たに掲載された分布図や，門田氏によるアルタイ山脈の高山植物，アザミ類，トウヒレン属についての挿入記事は，それぞれの植物についての理解を深めるばかりでなく，目前の高山植物から遠

く海外に目を向けるきっかけとなるものであり，初版編者の清水氏が目指した高山植物学が着実に実現されていることを示すものといえよう．高山植物の初心者はもとより，旧版を使い込んで愛着がでてきた人にもお薦めできる 1 冊である．

（邑田　仁 J. Murata）

□ニコル C. W.（栗原紀子・訳）：**アファンの森の物語**　B5. 229 pp. 2013. アートデイズ．￥1,400+税．ISBN 978-4-86119-208-1.

若いときに極地やアフリカで，レインジャーとしてサバイバルの技術を身につけた，1940 年生まれの著者が，空手修行のためにやってきた日本のブナ林に魅せられ，日本国籍をとって長野県黒姫山麓に定住し，荒廃する森林を買い取って財団法人を設立し，自然の保護•回復に奮闘する実録．アファンとは，彼の故郷ウエールズにある森林公園の所在地．日本では，そういう自然公園の維持管理に当たるレインジャーの技能や知識が貧弱で，ハッキリ言って見ちゃいられないとのこと．

エチオピアのレインジャーは，馬に乗れて，制服を着てライフル，弾薬，水筒，ポンチョを身につけ，ブーツを履いて 4 時間走り続けることができ，どこにでも野営して，ヒツジやヤギを殺して 30 分以内に調理する．カナダやアメリカのレインジャーなら，馬に乗れたうえ水陸両用車やスノーモビルを運転し，カヤックやカヌーやクロスカントリースキーを操り，泳ぎ潜ぐり，素手の戦闘技術を身につけ，射撃と狩猟ができ，大型動物を解体し，応急手当ができ，無線を使い，キャンプを設営する．それに加えて自分の担当地域の，自然と野生生物を知り尽くしている．日本でそんなレインジャーに会ったことはない．その上日本のレインジャーは，2 年ほどで転出してしまうので，任地の自然を知り尽くすヒマがない，と嘆く．

彼の要請を受けて，そういう人材を養成するための専門学校が設立されてもう 20 年になり，少なからぬ卒業生を出しており，私も多少の関与はしたが，なにせ入ってくる人間が，それにふさわしい気力も体力も基礎的教養も具えていないので，期待通りにはなっていない．これには親の姿勢の影響が大きい．子供に対して，いつまでも保護者のつもりでいるから ...

著者の奮闘の結果，財団の活動は，アファンの森を，単層林から自然に近い複層林に転換する事業を展開しつつある．わが国の自然の保護・復活にどのような影響を及ぼすのか，長い目で見守りたい．

（金井弘夫 H. Kanai）

□加藤紀子：**実生の観察（双子葉植物）**　B5（横綴じ）．268 pp. 2013. 私家版．￥500（送料込）．ISBN no number.

種子を採集，播種して，芽生えを観察，写生すること 15 年，500 種類におよぶ記録の中から，双子葉植物 100 科 205 種類をまとめたもの．1 頁の半分に詳細な観察記事があり，残りの半分に実生の全形（地下部，子葉，上胚軸，正常葉）がほぼ原寸大で描かれ，地表面の位置が示されている．地表面の位置は実生の性質を示す上で重要だが，はじめのうちは気付かなかったようで，2007 年以降（全体のほぼ半数）には，ほとんどが記録されている．果実，種子，子葉の葉脈なども，図示されているほか，花や生態を示すカラー写真が一枚付けてある．

4 ～ 8 頁は，観察結果の中で特記すべき事柄を総括している．カシワバハグマは，観察したキク科 31 種の中で，これだけが地下子葉だった．キイチゴ属では，子葉に毛や腺毛があり，この属の特徴であることなど，多くの事例を観察・記録している．

頁の右半分が写生図で，実生の図の下に 1 cm 相当のスケールバーが描いてあり，これは実生の図に対するものと理解する．これと共に描いてある果実や種子については，果実× 1, 種子× 1.5, 実生× 1 というように，一々描画倍率が示してあり，これがどうも分かりにくい．実生と同じ縮尺ならば，すでにスケールバーで示してあるのだから，それに加えて拡縮率を示す必要はないだろう．もし実生と異なる縮小率なり拡大率の図を描いたのなら，そこにだけ別なスケールバーを添えておけばよい．他の機会でも書いたことだが，植物画の人は，スケールバーを使うよりも倍率表示を使いたがる．その方が「芸術的表現」にふさわしいからだろうか？しかし「倍率表示」は，原画でなら通用するけれど，印刷物になるときにには，たぶん幾ばくかのサイズの変更（大抵は縮小）が行われるので，意味が無くなってしまう．「科学的な」植物画を目指すなら，その点を考慮すべきだろう．次の巻では，そういう点での配慮を期待する．

237 ～ 264 頁は「まとめ表」で，観察結果を 14 項目の見出しの下に，一覧表形式に整理してある．その数は 464 種類と，本文よりはるかに多

く，むしろこちらの方が本文ではないかと思わせるほどで，著者の努力が察せられる．本書はこれだけ多くの種類を扱っているのに植物名の50音索引がなく，図やまとめ表は科単位でまとめてあるので，検索に不便を感じる．ところが私がいただいた本には，巻末に図の植物名についての50音索引が付け足してあった．本書は著者から直接ではなく，仲立ちした小鴨寿美子氏から私に送られたもので，彼女が付け足して下さったのだろう．この索引にまとめ表の出現頁を付け加えたら，一層使い易い索引になるだろう．私費出版物（とは限らないが）には，著者のオリジナリティーを強く意識するあまり，他者の介入を許さない気構えのものが多いが，この程度のお手伝いなら，次の版のとき謝辞を呈するだけで，取り込んでもよかろうと思う．B5版の横開きなので，書棚に納まりにくいが，続編のスタイルを変えるわけにはゆかないだろうから，このまま進める他はあるまい．

入手希望者は上記金額の切手同封のうえ，183-0046 東京都府中市西原町 3-21-3 加藤紀子氏宛申し込むこと．申込方法や金額については，表示されていなかったので，問い合わせてここに付記した．印刷物にするということは，広く利用してもらうことを想定しているのだから，こういう情報を付けなければ目的を達しないので，遠慮なく明示してほしい．（金井弘夫 H. KANAI）

□西口親雄：**ナキウサギは氷河期の生き残り？遊びの生物地理** B5. 272 pp. 2014. ウッズプレス. ￥1,800+ 税．ISBN 978-4-907029-02-9.

「遊びの生物地理学」という副題がついている．著者の作品は何点か紹介してきたが，いずれも動植物についての「進化論」で，しばしば地質時代にまで遡って，大陸移動や気候変動や食物連鎖等々をとり混ぜ，地球規模の分布や種の進化の有様を絵解きして見せる．学界の趨勢や天下の形勢にとらわれずに，思ったことを言えるのは，アマチュアなればこそ ...，という意識はうらやましい．

まず，ウスタビガの繭の底に水抜き孔がある，という話しから始まるのだが，たちまちチベットのウスタビガに飛火し，これには水抜き孔がないのは何故かということになる．その前に，チベットにウスタビガの仲間がいることを確認し，その食餌は何かということを，現地の写真や資料からイヌザクラと断定する．更に進んで，日本のウスタビガが，いかにして大陸の先祖から環境の変化に適応しつつ，日本へやってきたかを，日本列島の成立，気候変動などをからめて物語る．このあたり，著者が蓄積した資料や協力者の情報が自在に活用され，ありきたりの進化論を超越した展開となる．

「日本列島の樹木相の変遷」では，古第三紀から現世までの過程を，気候変動と日本列島の離合集散，とくに大陸とのつながり方に重点を置いて解説する．

どの章もユニークで，一々紹介していられない．ブナやカラマツの進化史，ギフチョウの渡来と分布，ヤマネとミツバツツジ類の相関，アオスジアゲハとウォレス線，食草としてのスミレ・イイギリ・ヤナギと APGIII，ゴンドワナ大陸 etc, etc. みんな立派な筋道が立ててある．

私も分布を扱う立場の人間だが，分布図の精密化に気を取られるあまり，こういう大きな距離的・時間的視点があることを忘れていた．と言うより，日本国内の事象に気を取られて，ゴビやヒマラヤを一点として扱い，ゴンドワナ大陸の分裂・移動や地質学的時間の経過，それに伴う気候の変動，食物連鎖などが，現時点の種類の分布に直接関連付けられるような，規模雄大な構想が立てられなかった．時すでに遅しである．

（金井弘夫 H. KANAI）